

## 2. 近年の一、二歳児の発達

— 乳幼児保健のあり方 —

母子保健研究部 加藤忠明・斉藤 進・安藤朗子・高野 陽  
愛育病院 加部一彦・佐藤紀子・中林正雄・山口規容子

要約：愛育病院での1998～1999年出生児のうち、極低出生体重児、早産児などハイリスク児、及び両親ともに外国人の場合を除き、その後、同院母子保健科を健康診査のため受診した児1947名とその母親を対象とした。1、2歳児の発達は、1970年前後に同院を出生した児に比べて、早い項目が認められた。1989・90年出生児と比較すると、大きな差は認められなかったが、幼児自身が好奇心に応じて一人で行う行動は早くなる傾向が、逆に、対人関係に関連する発達項目はやや遅めになる傾向がみられた。

見出し語：一歳児、二歳児、幼児の発達、縦断的研究、健康診査

### Development of Recent Children at 1&2year Olds

Tadaaki KATO, Susumu SAITO, Akiko ANDO, Akira TOKANO  
Kazuhiko KABE, Noriko NATO, Masao NAKABAYASHI, and Kiyoko YAMAGUCHI

Summary : The subjects were 1,947 infants and their mothers who were delivered at the Aiiiku Hospital in 1998~1999. they were excluded extremely low-birthweight infant, premature infant, and the infant whose parents were both foreigners. They had a tendency to develop earlier compared to the children in 1970. Their development was almost the same as the infants who were born in 1990.

Key Words : Children at 1&2 years of ages, Development of infant, Longitudinal study, Health examination, and Child Health

#### I. 目的

1、2歳児の発達に関する以前の調査によれば、1970年ころに比べて1991年ころは、幼児の発達がやや早く、母親は自分の子どもが外でよく遊び、また、友達がいる子どもと感じている割合が比較的多かった<sup>1)</sup>。

乳児の発達に関する一昨年度の調査では、2000年ころの乳児の発達は、1991年ころの乳児と比較して大きな差が認められなかった。しかし、乳児自身が興味をもって一人で行動は早い傾向、また、親など養育者との対人関係に関連する発達は遅い傾向がみられた<sup>2)</sup>。

そこで今年度は一昨年度の研究に引き続き、近年の1、2歳児の発達を調査し、年代別の比較を行った。

#### II. 対象

総合母子保健センター愛育病院で1998年1月～1999年12月に出生した児のうち、明らかな先天異常をもつ児、極低出生体重児、早産児などハイリスク児、及び両親ともに外国人の場合を除いて、その後、同院母子保健科を健康診査のため受診した乳幼児1,947名(男児1,022名、女児925名)とその母親を対象とした。

この対象児のうち、生後17～18か月時の受診児は559名(受診率28.7%)、生後19～20か月時の受診児は112名(同5.8%)、生後21～22か月時の受診児は30名(同1.5%)、生後23～24か月時の受診児は404名(同20.7%)であった。

### III. 方法

母子保健科のカルテをデータシートに書き写し、保健師による母親への問診項目、小児科医師や心理相談員による健診結果などを、エクセルを用いて解析した。以前の縦断的研究の中で、他の項目と比較的関連が認められた発達項目を解析した。

#### 1. 発達の達成割合

比較的受診児数が多かった生後17～18か月時、23～24か月時の受診児に関して、発達項目の達成割合を求め、1、2歳児の発達を評価した。月齢表示の達成割合は、例えば生後17～18か月時の受診児の場合、生後17か月0日から18か月30日までの受診時点で、ある発達項目が可能であった割合である。以下、2000年値と略す。

#### 2. 発達の経年的比較

1970年前後に同科を受診した1、2歳児の同様の調査（調査期間は1960年～1975年であるが、その約90%は、1969年～1975年出生児である。以下、1970年値と略す）<sup>3, 4)</sup>、また、1989年～1990年に出生し、1991年ころに受診した児の同様の調査<sup>1)</sup>（以下、1991年値と略す）と比較した。

2000年値と1991年値は、同一カルテからの資料であったので、比較的多くの発達項目を比べられた。しかし、1970年値は若干異なっていたので、カルテ記載が同じ内容の発達項目のみ比較した。

### IV. 結果

#### 1. 発達の達成割合

生後17～18か月児559名、生後23～24か月児404名に関する主な2000年値を表に示す。括弧内に1991年値を示し、有意差が見られた発達項目に、\*を付ける。

#### 2. 発達の経年的比較

生後17～20か月児の2000年値と1991年値、及び1970年値に関して、「走る」が可能な割合を算出すると、各々610/647=94.3%、1227/1320=93.0%、1050/1205=87.1%、「単語」を話せる割合は、各々641/658=97.4%、1318/1332=98.9%、1595/1698=93.9%であり、1970年値に比較して、2000年値と1991年値は、各々有意に高かった（「単語」の2000年値と1970年値の比較のみ $p<0.01$ 、他はすべて $p<0.001$ ）。しかし、「簡単な指示や命令に応じる」の達成割合には有意差が認められ

なかった。

生後23～24か月児の2000年値と1991年値、及び生後23～26か月児の1970年値に関して、「外でよく遊ぶ」割合は、各々321/342=93.9%、1017/1066=95.4%、715/964=74.2%、「友達がいる幼児」の割合は、315/361=87.3%、911/1065=85.5%、905/1329=68.1%、「二語文」を話せる割合は、288/314=91.7%、835/948=88.1%、1025/1332=77.0%、「歌う」割合は、318/358=88.8%、935/1028=91.0%、705/875=80.6%であり、1970年値に比較して、2000年値と1991年値は、有意に高かった（すべて $p<0.001$ ）。

### V. 考察

平成12年度幼児健康度調査報告書によれば、1980年、1990年、2000年の全国的な幼児の発達に大きな差は認められなかった<sup>5)</sup>。しかし、都心に近い病院で出生した幼児に関する今回の調査では、1970年値に比べ、1991年値や2000年値の発達は早い項目がいくつか認められた。

乳児の能力研究とその発達研究は、この20年間にめざましい進歩を遂げ、育児に対する意識が変わってきている<sup>6)</sup>。その間、母子相互作用の指標ともなりうる母乳栄養率は、上昇傾向が認められた<sup>7)</sup>。

これらのことは、1、2歳児を取り巻く環境が、約30年前と比較して現在、良くなっている面もあると考えられる。1980年以降、①母子相互作用などがいわれ、乳幼児をより温かく受けとめる親が増加したこと、②父親の育児参加が増えて、父親と乳幼児との運動遊びが多くなったこと、③部屋全体を暖める暖房器具の普及などにより薄着で過ごす乳幼児が増え、からだを動かしやすくなったこと、等によって発達が早くなった可能性が考えられる。

1991年値と2000年値を比較すると、後者の方が「よく歩く」、「階段昇降」など、幼児自身に好奇心があるため自分で探索したり、一人で行う行動は早くなる傾向がみられた。このことは、子ども自身が自分の世界で遊べる傾向が強くなっていることを示唆しており、周囲から温かく見守られている幼児が、以前より自由に遊んでいる環境が想像される。

逆に、「子どもの中で機嫌よく遊ぶ」、「単語」、「垂直線を描く」、「なあにとよく聞く」、「排泄のしつけ」など、対人関係に関連する発達は、2000年値がやや遅めになる傾向がみられた。これらは、主として養育者が乳幼児にどのようにかかわるかによって達成割合が異なってくる項目である。最近の乳幼児は、親など周囲

表、月齢別発達の達成割合 2000年値（括弧内は1991年値）

月齢	発達項目とその達成割合%
17～18 か月児	上手に歩く98.4%=538/547 (99.0%)、走る94.2%=508/539 (92.6%)、 手をひかれて階段をあがる96.3%=519/539 (96.8%)、なぐり描き98.3%=520/529 (98.2%)、 積み木を2～3個積む*89.7%=472/526 (93.3%)、 子どもの中で機嫌よく遊ぶ***92.7%=467/504 (97.0%)、 大人とボールの投げ取り96.5%=491/509 (97.6%)、 掃除や化粧などをまねる99.0%=520/525 (98.7%)、単語**97.1%=532/548 (98.9%)、 簡単な指示や命令に応じる96.9%=525/542 (98.3%)、 絵本をみて物の名をいう82.4%=420/510 (84.1%)
23～24 か月児	よく歩く**100%=353/353 (97.3%)、走る99.0%=396/400 (99.3%)、 両足とび*83.8%=294/351 (89.1%)、つかまって階段のぼりおり*99.0%=387/391 (95.2%)、 つかまらずに階段のぼりおり***98.3%=236/240 (89.7%)、ボールをける94.7%=355/375 (93.7%) 垂直線を描く**77.9%=233/299 (84.6%)、外でよく遊ぶ93.9%=321/342 (95.4%)、 友達がいる87.3%=315/361 (85.5%)、他の子に関心を示してまねる97.4%=331/340 (97.9%)、 単語98.5%=385/391 (99.7%)、二語文91.7%=288/314 (88.1%)、 よくしゃべる97.1%=332/342 (97.5%)、歌う88.8%=318/358 (91.0%)、 なあにとよく聞く*73.3%=217/296 (80.1%)、歯みがき96.6%=311/322 (95.0%)、 手洗い*100%=258/258 (98.5%)、排泄のしつけ開始67.1%=216/322 (66.5%)、 誘って排泄可能***43.7%=69/158 (63.4%)、排泄できたら教える*83.8%=217/259 (88.4%)、 排泄する前に教える**52.9%=64/121 (65.7%)、 衣服の着脱自分でしたがる***71.4%=235/329 (91.0%)

\* :  $p < 0.05$ , \*\* :  $p < 0.01$ , \*\*\* :  $p < 0.001$

の人たちとのコミュニケーションが少なくなっている可能性がある。

現在の親たちは、比較的めぐまれた環境の中で自分の子ども時代を過ごしてきた人が多く、自分の要求を他の人あまり伝えない場合がある。自分の子どもに対して、何かを働きかけて何かをさせたいというより、子どもの環境を整えて、できる範囲で自由に行動させたいという気持ちが強くなっていると考えられる。

## VI. 結論

1、2歳児を取り巻く環境が、約30年前と比較して現在、全体としては良くなっている面もあると考えられる。しかし、最近の乳幼児は、親など周囲の人たちとのコミュニケーションが少なくなっている可能性がある。

## 参考文献

- 1) 加藤忠明、望月武子、松浦賢長他：最近の一、二歳児の発達。日本総合愛育研究所紀要第29集：15～18、1993
- 2) 加藤忠明、高野陽、松浦賢長他：正期産児の乳児期の発達。日本子ども家庭総合研究所紀要第37集：123～129、2001
- 3) 加藤忠明、平山宗宏、望月武子他：乳幼児期の情緒・言語発達に関する縦断的研究。日本総合愛育研究所紀要第25集：3～8、1989
- 4) 望月武子、加藤忠明、平山宗宏他：乳幼児期の運動発達、生活習慣に関する縦断的研究。日本総合愛育研究所紀要第26集：12～14、1990
- 5) 日本小児保健協会：幼児健康度調査報告書。2001
- 6) 志村洋子：赤ちゃんの能力と育児。ペリネイタルケア18(6)：28～34、1999
- 7) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局：平成12年乳幼児身体発育調査報告書。2001

